



今、ボランティアセンター担当者にとって大切なコーディネート力。企業との連携、福祉教育の推進、そして災害ボランティアなど、地域の課題に協働で取り組むため、コーディネーターが重要になっていきます。ボランティアセンター担当者が押さえるべきコーディネーターのポイントを連載で紹介いたします。

公益財団法人 長野県長寿社会開発センター  
主任シニア活動推進コーディネーター

とだちとみ  
戸田千登美さん

NPO法人日本ボランティアコーディネーター協会理事。子育て中から児童虐待防止のボランティア活動に関わり、長野市社会福祉協議会のボランティアコーディネーター・日常生活自立支援事業の専門員を経て、現職に。企業とNPO・ボランティアをヒト、モノ、コトでつなぐ「ながのボランティア・市民活動支援ネットワーク」の理事。また「まちの縁側育みプロジェクトながの」のメンバーとして「まちの縁側」も推進している。

## 第6回 男性シニアの豊かな経験と遊び心に火をつけよう！

「2007年問題」を覚えていますか？団塊の世代が60歳になり大量に定年退職者が生まれ、地域福祉を推進する側からは特に男性たちに地域活動に参加してもらおうと、あの手この手を駆使したことを思い出します。結局、ほとんどのプログラムは空振り。思ったほどにシニアは会社から地域に戻ってきませんでした。

この世代が65歳になったのが2012年。この頃から少しずつ男性シニアたちが地域で動き始めました。社協職員だった筆者がシニアの社会参加を促進する組織に仕事の場を移した時期でもあります。以降、シニア活動推進コーディネーターとして活動するなかで見てきた男性シニアの特徴（傾向）とコーディネーションのポイントを紹介しましょう。

### ボランティアの意味と強みを伝える

男性シニアは、自分から活動を始めるというよりは、頼まれる、誘われる、求められると動き出す人が多い印象があります。人生経験があるので、わからないことにチャレンジしてみよう！ではなく、具体的なニーズを見せる。それがわかると対応する活動を計画し、企業経験のある方は、企画書や予算を立てたりするのも得意です。反面、企業は上下が明確なためフラットな関係の場面が少なく、「対等な関係」の経験は不足しているという特徴も。若者やおばちゃんたちとおしゃべりが苦手というのもその一例です。

しっかりと計画立てて進めるシニアたちに、コーディネーターとしては「ボランティア活動はニーズに合わせて柔軟に変化させていくことができるのが強み」ということを伝えています。活動のなかで聞こえてくる声に耳を傾けると、それがニーズだと気づきます。そして、その解決のために仲間と話し合い、修正や改善を行っていきます。この体験の繰り返しで、自発性はぐーんと高まります。

スーパーの一角でお茶を飲みながらおしゃべりする「縁側」を開いているグループは、それだけでは寄ってもらえないと考え、地域包括支援センターに声をかけ、保健師による血圧測定もできるようにしました。測定値を忘れないように利用者がレシートの裏にメモする姿を見て、結果を手渡す血圧票を作成。そこには地域包括支援センターの連絡先と、次回の縁側開催日を記入しています。現場での出来事に気を配ることで新たな工夫が生まれた一例です。

### 価値観の変化を感じる楽しさ

シニアたちは、活動を通じて壁にぶつかりとコーディネーターのところに戻ってきます（こういう関係をつくるのが大切）。「あそこの受け入れ先は柔軟性がないな」「〇〇からこんなことを相談されたんだけど」等と、活動をする上での迷いや軸について不満が出てくることもあります。この時にどのような言葉をかけるのが重要で、ここではコーディネーター自身が「ボランティアとは何か」をしっかり理解していることが問われます。またシニアの活動の対象や場になる人や団体の様子を聞き、相手側へのアプローチも考えなければなりません。

以前、現役時代は木工技術を教えたシニアを障害者の作業所につないだことがありました。ミリ単位での正確さを指導してきた彼は、活動を通じてさまざまな人や場面と出会い、生産性ではない価値が社会にあることに気づきます。不完全でもいい、一つひとつ違うからこそ個性が生きる、

という気持ちの変化。活動を通じて価値基準を変化させた人たちは少なくありません。こうしたシニアたちを見ると「老後（ワケ）を楽に生きられるな」と感じています。

### 遊び心で多様化する活動のカタチ

さて、ここ数年、男性シニアに変化が見られます。災害が頻発していることもその背景にあるのかもしれませんが。地域活動やボランティアのハードルが下がり、地域のために何かしようという人たちが増加しています。男性だけのグループや、ゆるい感じの活動を楽しむ人も増えました。新型コロナウイルスの影響で活動が縮小しているなかで、「何か動けることはないか」「早く何かしたい」とうずうずしているようです。地区の役員も地域のことをよく知る人たちです。この人たちに何かをしてもらうのではなく、地域にこんな人いませんか？と尋ねることも大事。自分の人脈を生かして腕を振るってくれるはずで、

活動したい人たちはまだまだ地域にたくさん潜在しているそうです。コーディネーターとしては、シニアを入り口にしながらも、世代を超えた関わりや、今まで出会わなかった人たちが出会い、つながれる場づくりなど、枠組みに取られないコーディネーションを心がけたいものです。

